

### ジョイスの時代のダブリン(8)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

59

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

2009-10-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005269>

## ジョイスの時代のダブリン(8)

結 城 英 雄

### 女 性

#### モリー・ブルームをめぐる

モリー・ブルームはダブリンの男たちの間では有名らしく、1904年6月16日の一日、彼女は繰り返し話題にされている。だが男たちの見方はいずれも窃視症的で、彼女を一様にセックス・シンボルとして捉えている。メントンは言う「ちょっときれいな女だった [……] 満点だった」(6.705)、レネハンと言う「とにかく、[……] ありゃ生きのいい牝馬さ」(610.566)、サイモンは言う「ミセス・マリアン・ブルームはあらゆる種類の服をぬぎ捨てた」(11.496)、無名の語り手は言う「あの [ミスタ・ボイランの] 野郎め、きっとあの女をものにするぜ」(12.1001)、といった具合である。

男たちのこれらの発言の根拠を探ることは難しい。読者は彼らの発言をそのまま受けとめ、性に奔放なモリー像を思い描くだけである。実際、彼女は一日中家において、愛人のボイランと性行為に及ぶ以外、家事らしいこともほとんどしていない。第四挿話におけるベッドでの朝食の一コマ、ブルームのモリーをめぐる数々の回想、第十八挿話における彼女自身の独白なども、そうした印象を強めてくれこそすれ、否定するものではない。興行主ボイランとのこの一日の不義が結婚後初めての密通であるにせよ、彼女が一般の女性よりも性に奔放であることは動かしがたい事実である。

その一方で、モリーはブルームの妻であり、ミリーの母である。この役割を越えての彼女の存在はなく、歌手としての自立などもありえない。それゆえ、彼女の第十八挿話での内的独白も、エクルズ通り7番地に居住する平凡な主婦の告白として、また平凡な生活についての心情の吐露として、読めるのではなかろうか。彼女の意識を占めているのは、性についての奔放な妄想であると同時に、夫ブルームの翌日の朝食のこと、遠方で働く娘ミリーのこと、あるいは亡き息子ルーディのことなど、家庭の細々とした事柄である。よく読むなら、彼女が日常の家事一切を行なっていることも明らかである。彼女は「女であること母であることがどういうことか男にはちっともわかってなくて／男はどうして生れるのどこで生きてられるの／めんどろ見てくれる母おやがいなければ」(18.1440)とつぶやいている。家庭生活も切実な問題である。

作者ジョイスはモリーに何を仮託しようとしたのか。『ユリシーズ』の物語の最後に、男たちに聞き取れないように、彼女自身の「声」を配置したのには、それなりの理由があるはずである。新しい女性像

なのか、アイルランドの象徴なのか、それとも主婦としての不満なのか、あるいは男たちの欲望に対するパリノードなのだろうか。この問題に答えるには、ひとまず当時の女性の置かれた状況を、またアイルランド文学における女性の表象を検討する必要がある。

### 女性の職業

1904年当時、アイルランドの女性の職業の見通しは暗く、キャリア・ウーマンとして自立するには、相当の困難を要した。1911年に妹たちと労働組合を結成した社会主義者、ジェイムズ・コノリーの言葉を使うなら、アイルランドの女性たちは、イギリスの植民地主義とアイルランドの父権制という、二重の軛に縛られた「奴隷の中の奴隷」であった。たとえば、労働者階級の家庭では、ほとんどの女性が何らかの仕事に携わっていたが、それは乏しい家計を補うための労働でしかなかった。主婦の場合には、ブルーム一家で働くミセス・フレミングのような雑役婦になるか、オコネル橋でリングを売る老婆のような物売りになるか、いずれかであった。女中や女工として働く娘も多かったが、それも長時間の苛酷な低賃金労働であり、一時的な仕事にすぎなかった。なかには物乞いをする者もいた。

自立に近い仕事をしていたのは、働く必要がないと思われていた、むしろ中流階級の家庭の女性であった。『トム編ダブリン市住所人名録』の職業欄によると、ダブリンの中流階級の女性の職業として多いのは、縫製業、小売店経営、下宿屋、各種教師などであった。フロレンス・L. ワルツェルは、ジョイスの『ダブリンの市民』を詳細に分析し、この歴史的事実を裏付けている。小間物屋を営むフリン姉妹（「姉妹」）、デパートの店員のイーヴリン（「イーヴリン」）、下宿屋を営むミセス・ムーニー（「下宿屋」）、更正施設の下働きである独身のマライア（「土」）、ピアノ教師のミス・シニコウ（「痛ましい事件」）やメアリー・ジェイン（「死者たち」）、大学教師のミス・アイヴァーズ（「死者たち」といった具合である。物語の背景には、質屋の女主人ミセス・マーサー（「アラビー」）、あるいはゲール語の教師（「母」といった人物も点在している。

女性の職業ということでは、『ユリシーズ』でも同様の結論が下せる。スティーヴンがサンディマウントの海岸で目にする二人の産婆（第三挿話）、文通相手の手紙を受け取るブルームに対応する女郵便局長（第五挿話）、「ソートン花と果物店」の女子店員やボイルンの秘書のミス・ダン（第十挿話）、オーモンド・ホテルのメイドのリディア・ドゥースとマイナ・ケネディ（第十一挿話）、国立産婦人科病院で働く看護婦のキャランとクィグリー（第十四挿話）、娼家の経営者ベラ・コーエン（第十五挿話）といった具合である。これらはすべて中流階級の女性である。その他にも、かつてブルーム一家が寄宿していたシティ・アームズ・ホテルの経営者ミセス・オダウド（第十二挿話）、あるいはアミアンズ通り駅近くのドック酒場（第十六挿話）の経営者ミセス・M. A. ホールなどがある。

中流階級の女性たちのこれらの職業はれっきとしたものであるが、それらがすべて安定していたわけではなかった。たとえば、オーモンド・ホテルの二人のメイドを考えてみよう。ブルームの推測によると、彼女たちの週給は「18 シリング」（11.1076）である。この金額はイーヴリンの「7 シリング」やミリーの「12 シリング 6 ペンス」（4.425）よりも高いが、スティーヴンの月給「3 ポンド 12 シリング」（2.222）

をわずかに越える程度である。それだけで生活することは難しい。彼女たちが自活するには酒場の経営者にならなければならず、もしそれが不可能であるならば、結婚するか、もしくは娼婦に身を落とす以外に道はない。酒場のメイドたちが「ローレイ」や「セイレン」と呼ばれていたのも、故なきことではない。M. オステーンによると、彼女たちが衣装に気をつけるのは、男の注目を引くような商品に自らを仕立て、結婚の機会を狙っているためである (Osteen)。

当時の女性の職業案内である『アイルランドの女性に門戸を開け——アイルランドの女性に開かれた職業案内』によると、女性の職業選択の道はかなり限定されていた。タイピストにしても一名の求人に百名の応募があった。ミス・パーカーが会社の上司から、「そんな打ち方じゃ手紙が投函の時刻に間に合わない」と急がされても文句を言わないのは、そうした事情があるからである (「対応」)。逆に、ミス・ムーニーがタイピストになりながら退職するのは、家庭に経済力があるからである。この時代において、安定している職業はピアノ教師とか小学校の教師であったが、それなりの資格が必要であったにもかかわらず、給料は少なかった。モーカン家 (「死者たち」) では、ソプラノ歌手のジュリア、その姉のピアノ教師のケイト、同じくピアノ教師の姪メアリ・ジェインが同居しているが、これは家庭的な空間を仮構するためであると同時に、経済的な安定も大きな理由になっている。ミス・アイヴァーズのように大学の教師として自立するためには、相当優秀でなければ不可能なことであった。

そんな逆境をさらに煽っていたのは、職業に携わる女性への偏見であった。教会も女性の役割が家庭にあることを強調していた (Fairhall)。『ダブリンの市民』においては、少年の「ぼく」の世話をしている叔母 (「姉妹」, 「出会い」, 「アラビー」), アニー・チャンドラー (「少しの雲」), エイダ・ファリントン (「対応」), ミセス・シニコウ (「痛ましい事件」), ミセス・カーニー (「母」), ミセス・カーナン (「恩寵」), グレタ・コンロイ (「死者たち」) などみな専業主婦である。『若い芸術家の肖像』でも、スティーヴンの母のミセス・ディーダラスの仕事は、家事・育児である。『ユリシーズ』でも、モリーの歌手としての仕事の収入はほんの僅かで、一家の収入はブルームの双肩にかかっている。

### 結婚願望

こうした状況を背景に、独身女性には執拗なほど結婚願望がある。『ダブリンの市民』の19歳のイーヴリン (「イーヴリン」) やポーリー (「下宿屋」), また更生施設で働くやや年配のマライア (「土」), あるいは『ユリシーズ』に登場する22歳の娘のガーティ、彼女の女友達のシシーやイーディ (第十三挿話) など、みな変わりはない。彼女らの結婚願望は、思春期によるものというよりも、むしろ社会的な要請によるところが大である。結婚は生活を保証してくれる手段であったのだ。

実際、職業を持たず、さらに結婚できない女性は厳しい状況にあった。家族の面倒になるか、修道院に入るか、あるいは娼婦にならざるをえなかったのである。結婚は死活問題でもあった。イーヴリンは恥け落ちをしないかぎり、父親の家に留まり、家庭と職場という二重の奴隷生活を甘んずることになるだろう (「イーヴリン」)。マライアは施設で働いているが、将来は修道院に入る可能性が高い (「土」)。また『ユリシーズ』第十五挿話では、ガーティたちが娼婦的な存在として登場しているが、それは結婚で

きなかった場合の彼女たちの行末を暗示しているらしい。伊達男コーリーに騙されたかつての女中は娼婦に身を落としているし、同じく彼に「1ポンド」を貢ぐもう一人の女中も、やはり同じ道を歩むことになろう（「二人の伊達男」）。

結婚の機会が非常に少なかったのである。大飢饉以前には、人々は若くして結婚し出生率も高かったが、大飢饉以降は、人口減や産業の停滞のために、結婚率がきわめて低くなっていた。結婚するには経済的安定がなければならず、そのため男性の結婚適齢期は35歳くらいで、女性は自分よりかなり年上の男性と結婚せざるを得なかった。しかしその年齢に達した男性の中には結婚を煩わしく思う人もいるだろう。たとえば、ドーランは「自由な身でいろよ、結婚するなよ [……] 結婚してしまえばおしまいだぜ」（「下宿屋」）と本能的に感じている。統計によると、15歳以上の女性の未婚率は1881年、1891年、1901年において、それぞれ47.7パーセント、50.8パーセント、52.7パーセントと年々高まっていた（Thom / Walsh）。

結婚のもう一つの障害は花嫁の持参金である。持参金は男にとっては経済的利益であったが、娘を持つ家庭にとっても相当な負担であった。実際、二人の娘の良縁を願うミスタ・カーニーは、24歳になればそれぞれ100ポンドの持参金が入るよう、積み立てをしている（「母」）。「100ポンド」はW. B. イェイツの劇『キャスリーン・ニ・フォーリハン』におけるディーリアの持参金と同額で、一家にとりかなりの負担である。同じくブルームも娘ミリーのために保険に入っている（第十七挿話）。田舎では娘が結婚するのに持参金が必要とされていたが、ダブリンでもその慣習が幾分残っていたらしい。持参金のある娘との結婚を考えている、レネハンのような伊達男もいた（「二人の伊達男」）。

実は、ブルームが娘ミリーを写真屋に奉公に出した理由の一つも、こうした社会での女性の自立を考えてのことである。彼は「週給12シリング。多くはない。でも、あの子の職場としてはいいほうだよ。ミュージックホールの舞台よりは」（4.426）と安堵している。ミリーを実業学校である「スケリー女学校」（18.1006）へ入れようとしていた、妻モリーと意見が一致しているわけではないが、それでも娘の自立を思いやる心根においては夫婦とも同じである。

時代が変化するにつれ、人々の意識も変化していた。たとえ結婚しても、夫が破産したり、病気で働けなくなったり、死亡することもある。そのような場合に備え、女性の高等教育の必要性も叫ばれるようになっていた。娘ミリーに対するブルーム夫婦の思いやりも、そうした時代の流れと軌を一にしているのだろう。早くも1874年、教育者I. M. S. トッドはこう述べている。「中流階級の親たちが期待するのは、娘たちがみな結婚し、その結婚がどれも満足のゆくもので、夫たちがいつも巧みに、自発的に何でも進んで取り計らってくれることである [……] わたしたちは、そのような状況が望ましいかについて、わざわざ論ずるつもりはない。そのような状況は存在しないし、また存在しえないと指摘すれば十分であるだろう」。

#### フィオヌアラの娘たち

したがって、仕事も結婚も希望どおりにならないとき、独立心のある大多数の女性に残された唯一の

道は、他の地域へ移住するか、他国へ移民することであった。これらの女性たちは、「フィオヌアラの娘たち」と呼ばれている。白鳥に変えられ放浪を余儀なくされたという、アイルランド神話のリアの娘、フィオヌアラに由来する名称である。たとえば、「二人の伊達男」において、コーリーが騙す女中はそうした一人である。「青いサージのスカートに [……] 白いブラウス」という、彼女の服装をめぐる描写には、湖に浮かぶ白鳥のイメージが投影されている。

実のところ、1845年から49年にわたる大飢饉の結果、農村構造の大きな変化が起こった。女性は農業労働者として、あるいは羊毛、綿、亜麻といった織物により、これまで一家の経済に貢献していた。だが、大飢饉後は、家内工業の衰退、耕作から畜産への移行、小農家の減少といった事態に見舞われ、女性の貢献する場がなくなってきた。こうして多くの女性が移住ないしは移民した。コーリーが騙そうとする女中が田舎出身であることは、「飾りけのない粗野な健康」という描写にも明らかだ。ダブリンの女中の約70パーセントは、ダブリン以外の地域出身であった。

同時に、外国へ移民したフィオヌアラの娘たちも多かった。1885年から1920年の35年の間、約140万人が移民し、その半数の70万人が女性で、そのうちの約90パーセントが24歳以下の独身女性であったのである。この状況は農村部に限定されえない。二十世紀に入りその数が減少したとはいえ、移民は相変わらず国家規模で行なわれており、都市部からの外国への移民も多かったのである。移民を促すポスターもあちこちに散見されていた。ちなみに、1900年代における移民は、毎年4万人程度で、そのうち15歳から35歳の女性は1万5千人ほどである。またダブリンからの移民は約千名で、女性の数も少なくなかった。

移民する女性がフィオヌアラの娘と呼ばれるのは、故郷を離れ、異国に旅立ったからだけではない。受動的に移民した人々が多数いたであろうが、なかには自らの苦況を認識し、新たな活路を見出そうという、気力ある娘たちも多数いたのである。カトリック教会は、社会の存立基盤としての「家」の美德を語り、その一方で、独身で一生を送らねばならないという多くの人々の存在を無視しながら、「移民反対協会」の考えを支持していた。にもかかわらず、フィオヌアラの娘たちが敢えて移民の道を選んだとしたら、そこには女性の積極的な自立の身振りが読み取れるのではなかろうか (Nolan)。

ジョイスのテキストで移民が扱われているのは『ダブリンの市民』所収の「イーヴリン」であるが、主人公イーヴリンは出発間際にためらい、「無力な動物」のように鉄柵にしがみつく。なぜなのだろうか。移民先はアメリカが圧倒的に多く、次はイギリスで、さらにカナダやオーストラリアという順で、イーヴリンの向かうブエノスアイレスへの移民は少数である。だが、ブエノスアイレスへの移民が特殊であるわけではない。この地はかつてスペイン領であり、ケルトの祖先であるミレジア族がスペインからアイルランドに渡ったという伝説による親近感から、古くからアイルランド人の入植者もあり、その後イギリスとの交易が開始されやはりアイルランド人の移民がいた (O'Sullivan)。難点の一つはブエノスアイレス行きの船賃の方がアメリカへの渡航よりずっと高かったということであるが、その船賃は恋人のフランクが用立ててくれている設定である。

興味深いことに、イーヴリンの耳に取りついている母親の最期のつぶやき、「デレヴォーン・ゼローン」

には、ゲール語の残滓が聞き取れる。幼少のころ聞き覚えたゲール語の片言が、ふと母親の口をついで出たのであろう。その推測が正しければ、この母親は西部からダブリンに移住してきた人間であり、「家庭」というイデオロギーを無意識に後生大事にしてきたらしい。そして娘イーヴリンはその魔法にかけられ、埠頭で「無力な動物」のように身動きがとれなくなったのだ (Fairhall)。自らが不幸な結婚生活を送りながら、娘に同じ運命を担わせることに対する呵責は母親にもない。

したがって、自らも生活のために移民することになったジョイスが、イーヴリンの行動に「麻痺」を読み取ったのも当然である。「麻痺」という言葉は「姉妹」の中で使用され、『ダブリンの人々』を包括する用語であるが、それはジョージ・ムアの「未耕地」と同様、「テキストの境界」(Lowe=Evans)を越え、当時のアイルランドの政治的、経済的、文化的な状況を示唆している。したがって、そうした状況下にあるアイルランドに留まることは、不毛な一生を送るに等しい。

### 家庭生活

それでは、多くの娘たちが結婚に託す家庭生活とは、いかなるものだったのだろうか。当時、理想の女性像として、「家庭の天使」というイメージが流布していた。それは家庭という神殿を司る天使のごとき女性のことで、両親に仕える従順な娘であり、夫を支える良き妻であり、子供を慈しむやさしい母親のことである (Gilbert and Gubar)。この女性観がいかに中流階級の人々の間に浸透していたかは、第十三挿話でブルームが欲情する海辺の娘、ガーティの独白に明らかである。

しかし、家庭での女性の実際の役割は、そうした清らかなものとは程遠い、犠牲的・隷従的なものであり、実情は悲惨であった。結婚に対していまだにロマンティックな憧れを抱くミセス・カーナンさえも、結婚生活が退屈で耐えがたいと感じている一人である。そもそも、彼女のアイデンティティは「ミセス・カーナン」でしかない(「恩寵」)。女性たちは経済的にも屈辱的な立場にあり、家政をやり繰り返す必要経費についても、夫に懇願せねばならなかった。「アラビー」では、「ぼく」がバザーに行くための僅か「2シリング」のお金をめぐり、夫に代って叔母が立て替えることもできない。また「イーヴリン」でも財布を握っているのは父親である。女性は自由になるお金を持てなかったのである。夫が妻よりも平均10歳年上のことも、そうした状況を不可避にしていた。

モード・ゴンによると、結婚した当時の女性のほぼ95パーセントが、不幸な一生を送っているという (Levenson)。イーヴリンの母親は酒飲みの夫との生活に疲れ、狂気のうちに生涯を閉じている(「イーヴリン」)し、ステイーヴンの母親もたくさんの子を生み、癌に冒され、狂気のうちに亡くなっている。女性はストレスを内向させるためか、狂気に陥りやすかったのである。またフリン姉妹の場合は結婚しているわけではないが、兄のために犠牲を強いられている点では変わりはない(「姉妹」)。実際、ジョイスは「私の母は父の虐待、長年の苦勞、そして私の気ままな皮肉によって殺されたのだと思う。棺に横たわる痛で痩せ細った灰色の母の顔を見たとき、私は犠牲者の顔を見ているのだと理解し、母を犠牲者にした制度を呪った」(1904年8月29日付けの妻ノーラへの手紙)と語っている。

家庭内暴力も日常茶飯事であった。酒を飲み、妻に「肉切り包丁で襲いかかる」ミスタ・ムーニー

(「下宿屋」)、あるいは息子を鞭打つミスタ・ファリントン(「対応」)のような人物も多かった。家庭の安楽が欲しいと思うレネハンも、いずれ結婚したあかつきにはそうした人物になりかねないだろうし、ジョイスの家庭でも父親が妻を虐待したことが伝えられている(エルマン)。こうした虐待が社会問題とならなかったのにはいくつか理由がある。女性の地位が低かったこと、夫が拘留された場合に収入がなくなるために女性が告訴を取り下げること、政治の動乱期であったために他に重大な事件が多かったことなどである(Valius and O'Dowd)。カトリック教会は離婚を禁止しており、「下宿屋」のムーニー夫妻のように、結婚が破綻した場合、取るべき方法は教会から「別居」の許可を得ることであるが、そうした例も少なかった。

これらの女性の憩いの場は少なく、「対応」でのファリントンの妻エイダのように、教会に逃避する場合もある。夫ファリントンに給仕するパーテンも、妻エイダに奉仕する助任司祭も「キュレイト」(curate)である。あるいは、スティーヴンの母親のように、若きころの思い出にふける場合もある(第一挿話)。また男性のように酒を飲み、鬱憤を晴らすマーティン・カニングムの妻(第十五挿話)のような女性もいた。しかしながら、大方の女性は子供の養育に心を向けることで気を紛らわせる。そしてそうした補償的な愛情は往往にして歪みをもたらす。母親は息子に対しては強い愛着を抱き、また娘に対しては自分の不満のはけ口に利用する傾向があった。

「小さな雲」では、チャンドラーの妻は夫の存在を無視し、愛情を注ぐ幼子を「可愛い人」と呼んでいる。「対応」では、ファリントンの妻は夫が酔っているときは打たれ、素面のときは逆に夫に小言を洩らしている。「恩寵」では、カーナンの妻は結婚後まもなく夫婦の生活に退屈を覚え、子供に注意を向けることで気を紛らわしている。こうした母親と子供の関係はエディプス＝コンプレックスを構成し、息子の自立心を摘む。息子たちも成長したあかつきには、彼女たちの夫と同じ、自立心のない存在になる可能性があるだろう。ジャックじいさんは、自分のことを棚上げしながら、「母親のほうかね、なんののかんのと甘やかすものだから」(「鶉の日の委員会室」)と息子の愚痴をこぼしている。ちなみに、大学生であるスティーヴンも、母親に首をふいてもらっている(『若い芸術家の肖像』)。

ブルームの家庭も大差ない。モリーにも結婚前のブルームとの恋愛、ホースの丘での彼の求愛、ミリーを囲む家庭の団欒など、楽しい思い出は尽きないが、ブルームの失業などに伴う苦労を経験し、娘の自立した現在、残されたのは寂寥感である。手紙も配達されることもなく、エクルズ通り7番地の家に幽閉されているように思われる。最後に配置された彼女の独白は、そうした彼女の意識下の不満とも読めそうである。

### 女性をめぐるイデオロギー

ここで、女性をめぐる当時の支配的なイデオロギーを整理しておくなら、それらは父権性とマリア崇拜に纏められる。父権制はアイルランドにおける女性の隷従という社会構造により培われ、マリア崇拜はカトリックにおける聖母マリアの処女性という教義により広められた。父権性のイデオロギーをマリア崇拜が補強したと言えるだろう。

父権性のイデオロギーは十八世紀以降、特に十九世紀半ばの大飢饉を契機に強まったとされている。それ以前のケルトの社会では、女性の地位は高かった。すでに述べたように、女性も農業や織物などの家内工業を通して、家庭の経済に大きく貢献していたのである。だが、大飢饉以降、女性の働く場が減少した。また結婚率の低下に伴い、女性は10歳以上も年上の男性と結婚するのが一般的になった。こうして、男性の権威が高まり、女性の立場は従属的なものになった。時を同じくして、家庭の事情も変化した。レンジなどの台所用品が普及し、衣服や家具なども豊富になったため、料理や洗濯など家事が忙しくなったのだ。その結果、女性の役割は家庭を守ることに主眼が置かれたのである。

教会も女性のこの従属的な役割を強調した。1856年にジョン・グレッグ師が女性の領域は家庭にあることを説き、1882年に同様の主張を繰り返したバーナード・オレイリー師の著書、『本当の女らしさの鑑』は、1885年までに六版を重ねた。そしてこの役割に最も相応しいイメージが聖母マリアであった。教会は聖母マリアこそ家族を慈しむ女性の理想であると説いた。母親は聖母マリアのように、家族の精神的な拠り所であり、愛情と道徳の守り手としての役割が求められた。また、母親は子供を温かく包み、そして人間性、やさしさ、慈愛といった美德を示すよう期待された。1879年のメイヨー州のノックでの聖母マリアの出現、あるいはマリ・アラコックの教えなども、そうした教義を強めた。

同時に、「聖母マリアの無原罪の御宿り」という、1854年に発令された教義により、聖母マリアの処女性も説かれた。聖母マリアは性行為によらずしてイエズスを出産し、出産後も処女のままであった。この考えは聖母の生物学的な側面を否定し、精神性を高めることになった。そして若い女性の心に訴えたのはこの処女マリアのイメージであり、処女マリアが彼女たちの手本となった。従順に目を伏せ、つまましいショールを羽織り、青白い痩せた頬をした若い娘といったイメージが、女性の倣うべき姿として流通するようになったのである。マリア崇拜の浸透による (Innes)。

これらのイデオロギーが強力であることは、『若い芸術家の肖像』におけるスティーヴンの女性に対する視線を見れば明らかである。彼は女性を母、処女、娼婦という枠組でしか捉えられず、女性たちのみならず、彼自身をも支配しているイデオロギーを理解できていない。たとえば、母親に対しては安楽を与えてくれる存在という役割を求めながら、彼女が堪え忍んでいる主婦としての生活の重荷を理解できない。また恋心を抱く娘 E \_\_\_ C \_\_\_ に対しては、性からの解放を期待しながら、若い女性が教えられている性道徳に思いが至らない。さらに娼婦に対してはその性への気安さを誉めたたえつつも、彼女たちをそのような行動に駆り立てる社会を考慮することはない。

父権制とマリア崇拜によって説かれる女性のイメージは、既に述べたように、ヴィクトリア朝の「家庭の天使」に重なる。これはカトリックの司祭たちの出自と関係がある。彼らのほとんどが裕福な農家出身で、家族主義をその拠り所とし、ヴィクトリア朝の中流階級の道徳律を無意識に吸収していた。そしてその教えは、都市部を含む全国の教会で、また修道女を含むカトリック系の教師の指導を通じた学校教育で、広められていったのである。

## 新しい女性

その一方、この頃には自転車に乗ったり、ブルーマー服を着たりする、「新しい女性」が登場してきた。モリーは自転車に乗る女性、なかんずくそうした女性を眺める夫ブルームに対し、「風にあおられてスカートがおへそまでまくれている自てん車のりのずうずうしい娘たちをいつもみてるんだもの」(18.290)と批判的である。逆に、彼女はジブラルタルで過ごしたはるか昔、司祭が祭壇から「自てん車にのったりひさしのついた帽しをかぶったりそれからあたらしい女せいのブルーマー服」(18.138)を着ることを指弾したことについて、批判的に想起してもいる。このように新しい女性についても、第十八挿話のモリーの独白には彼女特有の矛盾した意識が反映している。彼女の立場は曖昧である。が、時代的に新しい女性が登場していたことは明らかである。

新しい女性というのは、ファッションなどで表面的に銜うより、むしろそのような動向の背後で女性の参政権、教育の機会均等、職業選択の自由など、男性と平等の権利を要求した女性のことである。これらの女性たちは十分な教育を受け、イギリスの植民地としてのアイルランド社会の状況に、また女性の地位の向上に機敏に反応していった。この時期、アイルランドの歴史においてきわめて珍しく、そうした男性に匹敵する幾多の女性が輩出していたのである。彼女たちは団結し、自らの要求を社会に主張していったのだ。

女性の権利の主張は、1896年に救貧法委員に女性を含む法案が通過し、1898年に市議会選の投票権が与えられるなど、少しずつ認められた(Scott)。そうした動向と軌を一にして、女性に国会議員選挙の投票権も認められるべきであるといった、スティーヴンのユニヴァーシティ・コレッジの友人、マッキャンのような進歩的な意見も展開されていた(『若い芸術家の肖像』)。実際、マッキャンのモデルであるフランシス・スケッフintonは、ジョイスの「喧騒の時代」と一緒に出版した「大学問題の見失われた一面」(1901)において、大学での男女共学論を論じている。

ジョイスは新しい女性を描くことがなかったと言われるが、「死者たち」のミス・アイヴァーズ、あるいは『スティーヴン・ヒーロー』や『若い芸術家の肖像』のエマ・クララーも新しい女性であるだろう。そして『ユリシーズ』では、イエイツの姉妹(第一挿話)、モード・ゴン(第五挿話)、リジー・トウィッグ(第八挿話)、レイディ・グレゴリー(第九挿話)、パーネルの妹フランシス・イザベラ・パーネル(第八挿話)といった、民族主義運動に寄与した女性の名前が折り込まれている(Scott)。

アイヴァーズもエマも架空の人物であるが、いずれもそうそうたる人物である。ミス・アイヴァーズの場合、「まず大学において、つぎに教師として」ゲイブリエルと似たような経歴をたどったと説明されている。彼女はゲイブリエルのユニヴァーシティ・コレッジと同等の、聖マリア・ユニヴァーシティ・コレッジを卒業した後、王立大学の資格試験をパスしたらしい。また彼女はケルト風の簡素な服装をし、アイルランドの紋章のブローチを付けているが、これも聖マリア・ユニヴァーシティ・コレッジがゲール語教育に熱心であった証である。エマ・クララーも、ユニヴァーシティ・コレッジの学生と接していること、あるいはゲール語の課外クラスに出席していることから推測するところ、聖マリア・ユニヴァーシティ・コレッジの学生であることに間違いはない。ジョイスの周辺にはこれらの人物のモデルに相

当する人物がいたのである。

事実、イエイツの姉妹、モード・ゴン、リジー・トウィッグ、レイディ・グレゴリー、パーネルの妹ファニーなどは実在の人物である。イエイツの妹のエリザベスとリリーは、それぞれ「ダン・エマー・プレス」と「ダン・エマー・ギルド」を設立し、出版や民芸品の制作で兄たちのアイルランド文芸復興運動を支援した。同様に、モード・ゴン、リジー・ツイッグ、レイディ・グレゴリーらもイエイツらと共同して、アイルランド文芸復興運動を推進した。また、パーネルの妹フランシス（ファニー）・イザベラ・パーネルは、1881年に兄パーネルが土地同盟の問題でキルメイナム監獄に投獄されている折、アメリカで女性土地同盟を組織した。さらにその妹のアンナ・キャサリン・パーネルも、アイルランドで過激な女性土地同盟を組織して、マイケル・ダヴィッドやパーネルたち男性の土地同盟を支援した。

注目すべき女性はその他にも多数いた。コンスタンス・マーキエヴィッチ伯爵夫人は、1913年のロックアウトや1916年の復活祭蜂起でも、男性的な雄姿で活躍した。またその妹のエヴァ・セリヌ・ゴア＝ブースも、公民権の運動家、あるいは詩人として知られている。さらにジョイスがよく訪問したことのある、デイヴィッド・シーヒー下院議員（第十挿話）の長女であり、ジョイスの大学時代の友人スケフィントンの妻となるハンナ・シーヒー＝スケフィントンも、婦人参政権運動で立ち上がっている。そして何よりも1900年に「エリンの娘たち」（9.1192/15.1936）という結社を設立し、アイルランドのイギリスからの独立を唱え、アイルランド人の自足の文化の獲得を標榜したモード・ゴンがいた。またエリンの娘たちということでは、ステンドグラスを復活させたサラ・パーサー、アビー劇場で活躍した女優のサラ・オールウッドと妹のモリー・オニーなどがいた（Coxhead）。

にもかかわらず、ジョイスはそうした女性の役割を評価していないのだろうか。ミス・アイヴァーズのモデルは、彼がよく訪れたスケフィントン家の四女であるらしい。だが、彼女はゲイブリエルにとり生意気な女性として登場しているにすぎない。また『ユリシーズ』には「フェミニスト」（15.1465）という言葉が一回だけ登場しているが、そのフェミニストも、ブルームがゾーイーの面前で市長から救世主へと変転する場面において、彼に「雄々しく」（15.1466）声援する役割を演じているだけだ。要するに、フェミニストは男性的な女性の意である。さらに第十五挿話において救世主として処刑される場面で、ブルームは「エリンの娘たち」（15.1938）に語りかけているが、この娘たちも、「腎臓、浴槽のフラワー、メントンに面して助言せし者 [……]」（15.1941）といった、ブルームの一日の雑多な側面の崇拜者ではない。ジョイスはウィーヴァーやビーチといった先導的な女性に出会いながらも、彼女たちのイメージをテキスト化することはしなかったということである。

一説によると、ジョイスがウィーヴァーやビーチといった先導的な女性と出会いながらも、新しい女性を描かなかったのは、たとえば、「死者たち」でゲイブリエルが同僚のミス・アイヴァーズに抱いたように、そうした女性の存在に不安を感じたためであるらしい。そうであるなら、彼も母親の死を招来した「制度」を是認していることになる（Fairhall）。ボニー・キム・スコットもジョイスをめぐる「フェミニズム詩学」を目指しながら、結局は平凡な人物分析に終始している（Scott）。にもかかわらず、ジョ

イスは、女性たちに「声」を与えることはなかったものの、女性の「声」の存在を、またその「声」を封ずる社会に目を向けていたことは事実である。

### 表象としての女性

そこで当時の女性の表象を検討しておこう。一般的に、アイルランドの民族主義者たちは、アイルランドを女性として表象してきた。そのイメージの一つは、「黒髪のロザリーン」である。これは十六世紀に作られた同名の詩で歌われ、十九世紀に詩人ジェイムズ・クラレンス・マンガンにより紹介されて有名になった。実際、『ダブリンの市民』の「アラビー」では、マンガンという名の娘を思慕する少年の物語を通して、ロザリーンの名が暗示されている。また『ユリシーズ』でも、民族主義者「市民」の敬愛する人物の一人として「ロザリーン」の名前が挙げられている。黒髪のロザリーンとは美しき処女であり、イギリスの支配下で苦しむアイルランドの表象でもあった。マンガンの詩は、ロザリーンのために命を捧げようとする、アイルランド人の愛国主義を歌っている。

アイルランドを表象するもう一つのイメージは、やはりマンガンによって翻案された「貧しい老婆」である。このイメージも古くからあったが、その流通はカトリック刑罰法の導入以降のことである。アイルランドの象徴となっていた、緑色や草のシャムロックを讃えることが禁止されたため、アイルランドの表象としては、この宴曲的な貧しい老婆というイメージも好まれた。イエイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』(1902)は、そうした伝統に基づいて書かれた愛国的な劇である。アイルランド独立を勝ちえたあかつきには、貧しい老婆が美しい女王に変身するという物語である。この女王に変身する老婆というイメージは黒髪のロザリーンの延長上にあるが、それは処女というよりも、むしろ母性を表わしている。その背景には、カトリック教会のマリア崇拝の影響もある。そしてこの老婆のイメージがアイルランド独立運動の一環として想像されたことは言をまたないし、1916年のイースター蜂起の隠れた原動力になったことも事実である。

こうしたイメージは、植民地支配下のアイルランドの状況を表現するのに、きわめて有効であった。その一方で、興味深いのは、アイルランドの女性表象が、イギリスの思い描くアイルランド観と寸分違わぬことである。国は女性で表象され、イギリスとアイルランドは「ブリタニア」と「ヒルベニア」と称されるが、イギリスはヒルベニアのことを美しいが弱い女性と表現し、同じく美しいが強い女性のブリタニアの庇護が必要であると主張している。当時の『パンチ』を見ると、兜をまとい、「法」と書かれた剣を手にしたブリタニアが、受動的で無力なヒルベニアを野蛮なアイルランド人から守っている、そんな戯画が多い。

その意味では、黒髪のロザリーンも貧しい老婆も陳腐な表象にすぎない。スティーヴンがそうした表象を指して、「腹子を食らう雌豚」(『若い芸術家の肖像』)と非難するのも当然である。なぜなら、黒髪のロザリーンも貧しい老婆も、民族主義という美名の下に、幾多の若者に犠牲を強いるからである。このロマンティックな虚偽を看破するスティーヴンは、その不毛性に異を唱え反論しているのである。民族主義者たちは、『フィネガンズ・ウェイク』の言葉を使うなら、「貧しい老婆コンプレックス」(祖国という

「母」への愛情+大英帝国という「父」への憎悪を複合するコンプレックス)に囚われ、それですべて由と考えているかのようである。

そして問題なのは、そうしたアイルランドの表象が、現実のアイルランドの女性の置かれた状況へと、投影されたことである。J. M. シングの『谷間の陰』が1903年10月に国民劇場で上演されたが、そのときの騒動はその事実を物語っている。この劇は老人のもとに嫁ぎ、愛のない生活を送っている若い妻ノーラが、ある日、同年代の若い放浪者と新たな生活を求め夫のもとから旅立つという話である。同年6月に『人形の家』がクウィーン座で上演されたときにも観客から黙殺されたが、女性の自立を描いたシングのこの劇は徹底的に非難された。たとえば、民族主義者のアーサー・グリフィスは、アイルランドの女性が愛のない生活を送っている事実を認めながらも、放浪者と出奔するようなことはしないし、そもそも不幸な結婚というテーマは国民劇場に相応しくない、と主張したのである。そして『本当のウィックロー』という劇を書いて風刺した。

この事件はアイルランドの民族主義者の理念の陥穽を示している。彼らは、アイルランドの女性が愛のない生活を送っている現実を知りながら、民族主義という名の下に、女性たちの忍従を無視しているのである。女性たちの生活を覆う不幸な陰は、大英帝国ではなく、アイルランドの旧弊な男たちである。シングに対するもう一人の批判者、モード・ゴンの場合は、さらに衝撃的だ。女性として自らも婚外関係で二人の子をもうけ、結婚後には不運な家庭生活を経験しながら、フェミニストとしての立場よりも、民族主義の立場を優先させることになったからである。上演の機会を逸しながらも、『キャスリーン・ニ・フーリハン』を凌ぐ斬新な手法の彼女の『夜明け』(1904)ですら、忍従するのは女性で、革命に立ち上がるのは男性という設定になっている。

ところで、重要なのはグリフィスたち保守的な観客の批判であるよりも、作家としてのシングが女性の置かれた現状に果敢に取り組んだことである。そして興味があるのはジョイスがそれにどう反応したかである。ジョイスは、イエイツの『キャスリーン伯爵夫人』が1899年に物議をかもした直後、「喧騒の時代」(1901)において、芸術家が 대중に迎合することを激しく非難した。また彼は妻ノーラとの関係においても、旧弊な婚姻制度に囚われることに強く反発していた。ジョイスが『ユリシーズ』のモリーの造形においてそうした問題を排除しているとは考えられない。

### モリー・ブルームの表象

モリーは『ユリシーズ』を象徴するかのようになり、いずれの時代もテキストの試金石に利用されてきた。1920年代においては、作品そのものを攻撃するのにモリーが標的にされ、彼女は「猥褻」というレッテルを貼られた。30年代、40年代においては「大地の母」という評価がなされている。これは、神話研究の隆盛の力を借りて『ユリシーズ』の権威を確立しようとする動きと、性活動の脅威を懐柔しようとする父権性の力学が連動したためであり、モリーのような女とは結婚したくないというのが内実であったろう。さらに50年代、60年代には、はっきりと「娼婦」と呼ばれた。これは『ユリシーズ』の権威が確立し、登場人物を貶めても作者を中傷することにならなくなったのと、反フェミニズムの考えが勢いを

増したためである。

その後、70年代、80年代には再びフェミニズムが隆盛となり、アンケレスなどの英米のフェミニストはモリーを今世紀初頭の文化的・歴史的・政治的・経済的コンテクストで読み、社会通念で規定された平凡な女性であるとか、「大地の母」という考えそのものが父権制による紋切型イメージであると論じた。その一方、シクスーなどのフランスのフェミニストは、モリー個人よりも、彼女を造形するジョイスの言語の用法に注目し、父権社会の特徴である二項対立の思考様式を打ち壊す「女性のエクリチュール」を指摘している。そして最近では、精神分析やポストコロニアリズムや文化研究という批評の隆盛と軌を一にして、モリーの意識の様態（言説）が多面的に論じられている。

これらの論考は『ユリシーズ』の奥行の深さを示し、いずれもそれなりの根拠を持っているが、問題なのは、ブルームやステイヴンの物語が終了した後、モリーの独白が最後に、しかも単独で配置されている理由を無視していることである。彼女の独白はブルームの耳に入ることもなく闇の中に消えていくだけである。フラナゴンの朗読による1993年のブロードウェイでの演出では、モリーはエクルズ通り7番地に自らを閉じこめることになった現実を見つめて涙する女性であったという。おそらくジョイスは、シングの延長線上に立ち、アイルランドの女性の置かれた状況をテキストの位置で示したかったのではなかろうか。イネスによると、「この耳にされることもない、文学的な芳香のない独白は、一つの物語の終わりであると同時に、女性が完全な声を持ちえることになる、新しくそしてより破壊的な物語の始まりでもある」(Innes)。

第十八挿話のモリーの独白は、「亭しゅ関ばく」のブルームへの不満で始まる。家事におわれる日常に若き日の情熱をそがれた彼女にとり、今やほとぼしる不満こそ、自らの存在を問う糸口なのかもしれない。そこには要約することのできない、彼女の人生が集積しているのではなかろうか。ちなみに、モリーは2,500人収容するベルファストのアルスター・ホールで、しかもJ. C. ドイルやジョン・マコーマックといった、当時の一流の歌手と共演する予定である。この事実は彼女の力量を示している。モリーは寝室に留まる官能的な女性であると同時に、舞台に立つキャリア・ウーマンでもある。

#### 参考文献

- Arensberg, Conrad. M. and S. T. Kimball. *Family and Community in Ireland*. Harvard: Harvard University Press, 1948.
- Bourke, Joanna. *Husbandary to Housewifery: Women, Economic Change, and Housework in Ireland, 1890-1914*. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- Bradley, Anthony and Maryann Gialanella Valiulis, eds. *Gender and Sexuality in Modern Ireland*. Massachusetts: University of Massachusetts Press, 1997.
- Bradshaw, Myrrha, ed. *Open Doors for Irishwomen: A Guide to the Professions Open to Educated Women in Ireland*. Dublin: Irish Central Bureau, 1907.
- Clear, Caitriona. *Nuns in Nineteenth-Century Ireland*. Dublin: Gill and Macmillan, 1987.
- Colum, Mary. *Life and Dream*. New York: Doubleday, 1947.
- Connell, K. H. "Marriage in Ireland after the Famine: The Diffusion of the Match." *Journal of the Statistical and Social Inquiry Society of Ireland*, vol. XIX, (1955-56):82-103.

- Cosgrove, Art, ed. *Marriage in Ireland*. Dublin: College Press, 1985.
- Cousins, James H. and Margaret E. *We Two Together*. Madras: Ganesh, 1950.
- Coxhead, Elizabeth. *Daughters of Erin*. London: New English Library, 1968.
- Cullen, Mary. *Girls Don't Do Honours: Irish Women in Education in the 19th and 20th Centuries*. Dublin: Women's Education Bureau, 1987.
- Daly, Mary E. *Women and Work in Ireland*. Dublin: Economic and Social History Society of Ireland, 1997.
- Gallagher, S. F., ed. *Women in Irish Legend and Literature*. Gerrard Cross, Bucks: Colin Smythe, 1983.
- Gilbert, Sandra. M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: the Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale University Press, 1979.
- Hayes, Alan and Diane Urquhart, eds. *The Irish Women's History Reader*. London and New York: Routledge, 2001.
- Henke, Suzette and Elaine Unkeless, eds. *Women in Joyce*. Urbana, Chicago, London: University of Illinois Press, 1982.
- Hill, Myrtle and Vivienne Pollock. *Image and Experience: Photographs of Irishwomen c. 1880-1920*. Belfast: Blackstaff Press, 1993.
- Hogan, Robert and James Kilroy, eds. *Lost Plays of the Irish Renaissance*. California: Proscenium Press, 1970.
- Innes, C. L. *Women and Nation in Irish Literature and Society, 1880-1935*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1993.
- Kennedy, Robert E., Jr. *The Irish: Emigration, Marriage, and Fertility*. Berkeley: University of California Press, 1973.
- Levenson, Samuel. *A Biography of Yeats' Beloved Maud Gonne*. London: Cassell, 1976.
- Luddy, Maria. "An Agenda for Women's History in Ireland, 1800-1900." *Irish Historical Studies*, vol. 28, no. 109, 1992.
- . *Women in Ireland, 1800-1918: A Documentary History*. Cork: Cork University Press, 1995.
- , and Cliona Murphy, eds. *Women Surviving: Studies in Irish Women's History in the 19th and 20th Centuries*. Dublin: Poolbeg, 1989.
- MacCurtain, Margaret and Donncha O'Corrain, eds. *Women in Irish Society: The Historical Dimension*. Dublin: Arlen House, 1978.
- Murphy, Cliona. *The Women's Suffrage Movement and Irish Society in the Early Twentieth Century*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1989.
- Nolan, Janet A. *Ourselves Alone: Women's Emigration from Ireland, 1885-1920*. Lexington: University Press of Kentucky, 1989.
- O'Sullivan, Patrick, ed. *Pattern of Migration*. Leicester: Leicester University Press, 1992.
- Owens, Rosemary Cullen. *Smashing Times: A History of the Irish Women's Suffrage Movement 1889-1922*. Dublin: Attic Press, 1984.
- Pearse, Richard, ed. *Molly Blooms: A Polylogue on "Penelope" and Cultural Studies*. Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1994.
- Scott, Bonnie Kime. *Joyce and Feminism*. Bloomington: Indiana University Press, 1984.
- Stubbings, Diane. *Anglo-Irish Modernism and the Maternal*. New York: Palgrave, 2000.
- Walsh, Brendan M. "Marriage Rates and Population Pressure: Ireland, 1871-1911." *The Economic History Review*, vol. XXIII, no. 1, 1970.
- William, Trevor L. "Resistance to Paralysis in *Dubliners*." *Modern Fiction Studies*, vol. 35, no. 3, 1989.
- Valius, Maryann Gialanella and Mary O'Dowd, eds. *Women & Irish History*. Dublin: Wolfhound Press, 1997.